
銀色の暗殺者

のほん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の暗殺者

【Nコード】

N0915Z

【作者名】

のほん

【あらすじ】

大海原小学校に通うショウ。

ある日そこに転入してきたリュウ。

この2人の、ちょっと複雑な物語。

第1話 ショウとリュウ

キンコーン カンコーン

ホームルーム

HRの始まりを告げるチャイムが鳴る。

どたばたと、席に戻るみんな。

いつもなら、チャイムが鳴っても2〜3分ほどはおしゃべりをしていて、先生に怒られるのに、今日は違う。

あっという間に、教室は静まり返った。

そこに、ガラガラと大きな音をたてて、5年2組と書かれたドアに先生が入ってきた。

教室の黒板の前まで来ると、「間に合った……」と呟き、みんなのほうを見る。

服装は、青いパーカーにジャージとゆう、少々チャライ格好。

「どうしたんだ？今日はやけに静かじゃないか？」

若い男性の声が聞いてくる。

「昨日の帰りの会で、転入生が来ると聞いたからです！」

男子の1人が言う。

「そうです！」と他のみんなも言う。

教室は再びチャイムの前の状態……ザワザワし始めた。

「そう言えば、そうだったな……すまん」

みんなは首をかしげている。

「その転入生は、今日じゃなくて、明日来るんだ。俺の報告ミスだ。本当にすまん」

ハア……とゆう、ため息があたりこちらから聞こえる。

ホームルーム

HRで話した事は、転入生を迎えるお楽しみ会の計画だった。学級委員長が黒板に箇条書きでいろいろな意見を書いている。

「……ハア、つまんない」

呟いた。

大きくも、小さくもない声で。

ふと、隣の女子が振り向く。

「どうしたの？ ショウ君」

話しかけられて、ハツとなる。

無意識に何かを呟いていた事に、顔が真っ赤になる。

「カリナ……オレ、なに呟いてた？」

とっさに聞く。

すると先生がこつちを見て「喋るな」と、注意をする。

「怒られちゃったね」

横を向いてカリナが言う。

やわらかい笑みに、どこか安心を覚える。

ショウはまだその感情に気づいていない。

「ハア」

本日、2回目のため息。

放課後。

下校時刻を告げる放送が、運動場に響く。

ショウは、1人で家へと帰る道を歩く。

校区外にある家は、学校から30分ほどかかる。

1年生の頃は、まだ母親が送り迎えしていたが、父親の入院のせいで、忙しくなった母親は、そんな暇などなく、ショウは道を覚えて1人で帰らないといけなくなったのだ。

歩いていくうちに、大きな杉の木が見えた。

人工的に植えられたこの杉の木は、あまり大きくないけど、でも、幹はとても丈夫で、ショウのお気に入りである。現にショウは、この木に『レイン』と名前をつけている。

この木が見えたら、家はもう近くである。

「……？」

レインに誰かがもたれかかっている。

身長は150cm前後だろう。

長くもなく、短くもない髪の毛は、あまり綺麗じゃない茶色。瞳も髪の毛と同じ色。

おそらく男子だろう。でも、男子にしては、あまりにも細身だった。どこか不思議なオーラを感じる彼は、ゆっくりとシヨウの方を向く。急に彼と目が合って、驚くシヨウ。

まじまじと見てみると、とても整った顔立ち……女子の言うイケメン。

「……何見てんの？」

やさしいが、どこか冷たさを感じる声で彼が聞いてきた。

シヨウは恥ずかしくなって、とつさに、

「オレ、シヨウって言うんだ。お前は？」

苦笑いを浮かべるシヨウ。

「……クスッ」

彼が笑った。

天使のような彼の笑みに、思わずオレも笑顔になる。

「ボクはリュウ、年齢は君と同じくらいかな」

「リュウか……漢字はなんて書くんだ？龍か？それとも竜か？」

「漢字？そんなのはないよ」

「そっか……それより、見かけない顔だな……どこから来たんだ？」

「イタリア」

「すっげえじゃん！ピザの本場じゃねーかよ。オレの大好物なんだ！」

「そうなんだ。ボクもピザは好きだな」

「そっか、じゃあ今度一緒に食べよ！そっうや、リュウって今どこに住んでるの？」

リュウの顔が一瞬曇った。あくまでも一瞬だ。

すぐにさっきの笑顔に戻って、

「それより、シヨウってどこの学校に通っているの？」

「大海原小学校」

「へえ……それじゃあ、これから用事があるんだ、またね」

「え？……っじゃあな」

リュウは早歩きで、どこかに行った。

「おもしれーヤツだな……」

シユウはそう思った。

そして家への道のりを歩いていった。

今朝の教室は、転入生の話で盛り上がっていた。

「女子かな？」「かつこいい男の子かも！」「かわいいかな？」
ガラガラ……

「みんな席に着いたか？じゃあ、入っていいぞ」

コツコツと足音を立てて、転入生が入ってきた。

「……っつ！」

驚きのあまりに、声が出ない。

教室に入ってきたのは、リュウだったのだ。

第2話 事件発生

「リュウ……おまえ、なんで？」

リュウは、シヨウの方を見ると、ニコツツと笑った。

みんなは不思議そうにリュウとシヨウを見る。

「また会えたね、シヨウ」

休み時間。

シヨウは早速リュウの所へ行こうとした。

しかし、リュウの周りにある男子と女子の巨大な壁で、リュウとは目を合わすことすらできなかった。

「おーい！リュウ」

少し大きめの声で、リュウの名前を呼んでみる。

すると、リュウは気づいたのか、立ち上がってシヨウのほうに行く。そして小さい声で「話したい事がある」と言って、シヨウの左腕を引っ張っていった。

「何だよ急に……」

「いいから来て！」

そうしてリュウに連れられて来たのは、理科室だった。

リュウは周りを見て、誰もいないのを確認すると、急に深刻な顔をしていった。

「シヨウ……話したい事がある」

「なんだ？」

「ここまで来る間に、いろいろ迷ったんだが、やっぱり言おうと思う」

リュウは息をゆっくり吸って、シヨウを睨むように見た。少し身を引いてしまう。

「誰にも言わないと約束してくれ」

「わかった」

「実はボク……」

「キヤアアアアア……!!」

突然、大きな悲鳴が聞こえた。

「やばい! ショウ、この話はまたいつかする。今は悲鳴のした方へ行こう」

リュウとショウは、理科室を出て、悲鳴のしたほうへ走っていった。「……!」

そこには、小さな女の子が倒れていた。

腹からは、真紅の血が大量に流れている。

「ショウ、大人を呼んできてくれ」

ショウは、「う、うん」と答えて、職員室へ走っていく。

リュウは、羽織っていたパーカーを、女の子の出血した部分に固定する。

「脈は正常だし、呼吸もしている……いったい誰が?」

リュウは呟いた。

しばらくして、大人たちが駆けつけてきた。

救急車で運ばれていった女の子は、苦しそうに息をしていた。

「なありユウ……あの子、大丈夫だよな?」

ショウが聞いてきた。

「大丈夫、命に別状はない。出血が多かったが、ちゃんと応急処置はしといたから安心していいよ」

「そうか……なありユウ」

「今度はなに?」

「あの傷って、何にやられたんだろう?」

「おそらくナイフかなんか」

「オレ、ナイフじゃないと思うんだ……」

「じゃあ、何?」

「なんかに挟まれた様な……鋭い爪とかで」

「なんでそう思うの?」

「ナイフにしては、傷が深すぎるような感じがした」
「……………」

リュウが驚いた顔をした。

「観察力があるんだね」

「まあね」

しーんと沈黙が続く。

「リュウ？」

よく見ると、リュウが震えている。

「どうしたんだ？」

「……………こわかった」

意外な言葉に、驚くシヨウ。

「どうしてだ？」

「血……………いっぱいあった……………いなくなる……………みんな……………」
最後のほうの意味をシヨウが理解できるようになるのは、まだ先のほうである。

この時シヨウは、「リュウは血が苦手なんだな」と思っただけだった。
チャイムが鳴る。

2人はハッとして時計を見る。

次の授業が始まる時間だった。

急いで教室まで行った。

遅刻したはずなのに、先生はおこらなかった。

そして一言、

「リュウとシヨウは、少し話があるから職員室まで来い」
と、告げたのだった。

呼び出されて、リュウとシヨウは職員室に来ていた。

「休み時間にあった事件のことなんだが……………」

先生がそう言った瞬間、リュウの体が細かく震え始めた。

「何か知っている事があれば、教えてくれ。どんな小さなことでも

いい」

そうして5分ほど話した後、2人は教室に返された。

「大丈夫か？リュウ」

「ああ」

静かに教室へと戻っていった。

この事件が、ほんの前触れに過ぎないことをしらないで……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0915z/>

銀色の暗殺者

2011年12月3日17時56分発行